

浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

第118回 (2019.01.09) の要旨

拝読文(『真宗聖典』63～64頁)

今我、衆等、度脱を得ること蒙る所以は、みな仏の前世に道を求めしの時、謙苦せしが致すところなり。恩徳普く覆いて福祿巍巍として光明徹照す。空に達せること極まりなし。泥洹に開入して典攬に教授し威制消化す。十方に感動すること無窮無極なり。仏は法王として、尊きこと衆聖に超えたまえり。普く一切天人の師と為りて、心の所願に随いて、みな道を得せしめたまう。今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし。心開明することを得つ。」

ここは弥勒段と言われるのですが、「今我、衆等」とあります。「我」というのは弥勒菩薩ですね。そして「衆等」、つまり「仏、弥勒菩薩・諸天人等」といって、弥勒菩薩がそれらを代表して聞く。その後ろに諸天人等のような呼びかけるべき衆生がいるわけです。

こう押さえて、「度脱を得ること蒙る所以は」とあります。この「度脱を得る」は、本当に苦悩の人生に埋没している人生だけで良いのかという時に、仏陀の教えをしっかりといただいて解放されるという方向性のことです。「度」は渡るという意味をもっていますから、人生の意味を本当に自覚する・目覚めるという意味が「度」という文字に秘められております。それが仏教の真髓になるわけです。「脱」は解脱ということ。自らの有限の条件に引きずり回されているという我々の人生の事実から脱出する。明るみに触れて、あえてこの人生を喜んで生きていこう、というふうに変じられる。

そういうことが仏教の功德で、この苦悩の命を尊い命としていただき直す必要があるわけですが、それが見えずにいると、この段で「三毒五悪段」と名付けられるような真つ暗闇の中にもがいている人生になってしまう。そうではなくて、その人生の直中に如来が明るみを与えて下さるのだということを知っていく。そしてそれを本当に知っていくことによって、新しい人生が開ける。こういうことを、昔から覚りとか正覚とかawakeningと言う。つまり目覚めがないと、単に人生に引きずり回されて苦しんでしまうわけです。本当の苦しみを知らないで通り抜けてしまう場合、それは仏陀の眼から見れば人生を無駄に過ごしてしまったというだけになってしまう。そういうときは、人生の苦悩の場をすり抜けていってしまえるという夢を描くわけです。端から見れば楽そうに見える人生も、実際は本人にはとても大変であり、とても愚痴が深いわけですね。その愚痴が出てくるということは、人生を本当に生きていないということです。与えられた縛りから逃げ出さずに、それがむしろ自分の尊い人生の大切な機縁なのだといいただき直して、それを引き受けていく姿勢が与えられるのが、この「仏陀の教えを聞く」ということの意味なのだろうと思うのです。だから、「度脱を得る」ということが目的なのですが、このことがなかなか分からない。仏教は、何か死んでからたすかるというようなことを言っているわけではないのです。苦悩が与えられていない命などあり得ないわけですから、苦悩が与えられていることを本当に大切な機縁として、人生を本当に前向きに喜んで生きていくという方向を与えられてくるのです。それが仏陀の教えですから。

そういう意味で、この親鸞聖人がおっしゃる「現生」ということは、大切な聞法の間なので。現生こそ、勝負なのです。だから来世のことに逃げてしまうのは、仏陀の教えの方向性と違うわけです。だから願生と——ここで安楽国に生まれんと欲えと呼びかけるわけで、違う世界のことを言っているのではないのです。そういう方向性で聞いてしまってきたのが間違いだと気づいたのが親鸞聖人で、この現生の苦悩の命の直中で願生の命に遇うのが大切だとおっしゃる。親鸞聖人は、本願力に遇うということは信心一つなのだとか教えようとされる。我々が如来の願いに出会い、如来の願いを知ることが、信心の真髓なのですね。

「みな仏の前世に道を求めしの時、謙苦せしが致すところなり」。「仏の前世に道を求めし」というのは、「本生譚」とか「前生譚」と言われる物語の形で仏陀の願いが教えられる。仏陀が自分のいただいている智慧を、何とか苦悩の衆生に与えたいと思ってさまざまに教えを説かれますけれど、どうにもびったりきて下さらなかった。そういうときに、前世で自分はウサギであったとか、狐であったとか、物

語や童話のような形で本生（本来の生）を語るのです。単に人生に迷っていて、修行して苦勞したから今覚りが開けたというものではなくて、何か違うものがここで自分に開けてきたのだと言うために、「本生譚」が語られるのです。

例えば、『涅槃經』に雪山童子の話というのがあります。雪山に修行僧がいて、何か遠いところから声が聞こえてきた。それは仏陀の教えを偈でその修行僧に聞かせて、苦惱の人生から脱出させようとして呼びかけてくる。ただ、聞かせる偈は前半の「諸行無常、是生滅法」だけだったので、羅刹（日本語で言えば鬼）が出てきて、「お前の要求通りに偈を聞かせてやるが、代わりに腹がすいている儂にお前の肉をくれ」というのです。こういう取引に対して、雪山童子は偈の後半の「生滅滅已、寂滅為樂」を聞かせてもらって、羅刹の口に身を投げるといふ物語です。つまり、命を懸けて法を聞くのだと教えられているわけです。

その「命を懸けて」というのは、単に生命が一番大事だということになると、この世の話になるわけです。今の世の中はほとんどそういう価値観ですね。でも、それでは悪業の人生を悪業の中に埋没して生きることではいけないのだということと呼びかけるわけです。そこから脱出するということは、単に生命現象が大事だと執着している人生では駄目なのだよということと呼びかけているわけです。これは難しいことなのです。我々はどうしても、何とか自分の欲も希望も全部この人生だと考えて、今この人生で与えられた場にかけてもがいていますから。そういう人生をずうっとやって、それで命が終わってしまう。生命があるということは、死が必然ですから、必ず終わる。その時に「では何の為に生きたのだ」ということが見えないというのが、三毒五悪段と言われるような悪業の歴史——悪業の事実に加担してそれに引きずり込まれているだけなのだ、散々教えて下さっているのです。しかし、「自我が尊い」「自分が生きていることが尊い」というのが我々の価値観ですから、そこから脱出するということは物語的な形でしか教えられないわけです。人間は単に個人で生まれたわけではなく、一緒に生きている場で本当に命を生きるということはどういうことか、そういうことが大乘仏教の課題になるわけです。

その時に、本願の物語というものが非常に大きな意味を持つてくるのです。それはつまり、一切衆生に呼びかけて平等に救いとりたいという法蔵菩薩の物語ですね。果てしないような広大な願心です。こういう願心を書く時は、我々の個人性や個人的な救いでは許されない。法蔵菩薩の願いでは、平等に救う場として安樂国というものが教えられているわけです。「仏の前世に道を求めしの時」というとき、教主世尊（釈迦牟尼仏）が前世に道を求めたという物語は、つまり法蔵菩薩がある意味で釈迦如来の前身で、釈尊が『無量壽經』という形で仏説を開いていく内実が大乘の「本生譚」なのであって、大乘仏教が呼びかけようとする本当の命の物語という意味を持っている。こういうことが、今のこの言葉に暗示されているわけです。

「**仏の前世に道を求めしの時、謙苦せしが致すところなり**」。仏陀がこの世で勤苦したのは六年間ですが、それだけで本当に人生から解放されるような智慧が開けたのではない。親鸞聖人も、自らの人生をいただいて二〇年間苦勞した結果として今本願の教えに出遇えた、というわけではない。「遠く宿縁を慶べ」といって、遠くずっと道を求めてきた歴史があって、初めて今成り立ったのだという。それは単に個人に出遇えるものではない、もっと広大無辺なる功德に出遇ったという意味が、今ここに書き出されているのです。この人生の中で苦勞したから出遇ったという個人性のもものでは、法蔵菩薩の本願と言われるようなものにはならないわけです。ここが難しいところでね。「大悲の本願と値遇した」というときの「値遇」とは、こちらから求めずして出遇ったのであって、求めてみたけれども出遇えないのでもある。そういう時、やはり深い背景から何か催してきて出遇いが生ずる。こういうことが、本願力との値遇ということを親鸞聖人が感謝される時の大切な条件なのです。

これは清沢満之先生が押さえるように、有限な条件のように見える中に無限がはたらいているのだから、名号もそういう意味を持っているわけです。名号とは、単に阿弥陀仏という個人名ではないのですよ。大いなる背景から名が出ている。「南無阿弥陀仏なんて単なる名前ではないか」と考えている人間にとっては価値がないけれども、「南無阿弥陀仏」という名は、本願が衆生に呼びかける大事な名なのです。本願が呼びかけるのは、我々が求めて得られない程の大きな功德を与える為なのだ——そういう物語の背景を、どこまで信ずるか。これはなかなか面倒なことですね。では、聞かないで良いのか、いつまでも放っておけばそれで来るのかといえば、そういうふうには他力が来るはずがない。やはりもがいて聞いていくしかないけれども、聞こうと努力して聞けてくるのでない。これが難しいことです。ストーリーを教えて聞かせて、それで分かるのは理性で分かりますよ。でも、教えたからわかる訳ではないのです。出遇うべき広大無辺の世界は、頭で分かる話ではない。ここが面倒な話です。

「謙苦」にある「謙」という字は、へりくだるという意味を持っている漢字ですね。前世に本当に苦勞した人生があったから、今こういう教えを説くことが出来るのだという形で説かれてくる。例えば法蔵菩薩の物語は、衆生を救う為に兆載永劫に修行すると呼びかけるわけでしょう。その法蔵菩薩のご苦勞が背景となって、今、この疑い深く罪深い人生を生きている私に大悲の本願が聞こえてくるのだという。つまり自分の苦勞ではない「謙苦」なのだという。それは、何か見えない力がはたらいて来たから、今自分がこういうことをすることが出来たのだと示すひとつの表現なのですよね。スポーツ選手であれば、失敗したり負けたりすることもあるのですから、そういう折れてしまいそうな時に「支えて下さる方があるからここまでやれたのだ」と感じられるのですよね。

だからここで、「前世に道を求めしの時、謙苦せしが致すところなり」という形でポツンと『無量寿経』の背景を語っているわけです。仏陀が説いたことの意味はどういう意味なのだということを、仏弟子の僧伽が議論しながら経典の形で生みだしていったわけです。

「**恩徳普く覆いて福祿巍巍として光明徹照す**」。仏陀の恩徳——つまり仏陀が説いて下さった御恩・功德というものは、普く覆う。これも、仏陀の開いた世界に出会うということは、仏陀の教えが人類すべてを覆っているのだと見られるようになるということでしょう。個人だけが値遇したというものではないわけです。「福」も「祿」もこの世的な幸福を表わす文字ですけれども、それが単にこの世の幸せではないものに出遇った幸せを表わそうとしています。それが巍巍として——これは「光顔巍巍」と同じで、非常に大きな山がそびえていることを示しているのですが——非常に顕著に強く大きく、ということです。そして「光明」は、心の明るみを示すわけです。だから「光明」が智慧の相だというふうに言われるのは、「ああ、そうだった」と気づくことによって開ける明るみだということです。この苦惱の人生が今までは見えなかった我々が、ちょうど夜が明けたようにこの智慧に出遇うことによって明るく見える。比喩的に言えば、そういう光が徹底して照らすということが、仏陀が教えようとする度脱の世界なのです。

そして「**空に達せること極まりなし**」。これは大乘の経典ですから、大乘の智慧というものが空(sūnya)という言葉で言われるわけです。つまり空というのは、執われがなくて淡々と、しかも明るく生きていけるということですね。「人はかるがるとしたるがよき」という蓮如上人の言葉がありますけれども、つらい仕事がどれだけあっても、かるがると喜んでやっていく。そういうふうにならなければならぬのが仏法の功德だという表現が、「空に達する」ということなのですね。仏陀の福祿というのはものすごく大きいし、光は徹底的に照らして来るし、それで空に達する。まったくこだわりなく淡々と生きているのだということです。

「**泥洹に開入して典攬に教授し威制消化す**」。「泥洹」というのは、「涅槃」とも訳されるニルバーナ(nirvāṇa)のことですね。大乘の涅槃ですから、涅槃に開き入るといえるのは単に死滅の世界ではない。空に達して、騒がしさが消えるような静けさを「泥洹」という言葉で教えているのです。有限な人生の中に何か静かになれる拠点をいただくことで意識が転ぜられる、そういう智慧が仏陀の解脱(菩提)の智慧で、涅槃というものと対応します。「菩提」はボーディ(bodhi)ですから「覚り」「大解脱」ということです。主体的に迷いの意識が転ぜられた在り方が菩提であり、転ぜられた在り方で見られた生死(苦悩の人生)そのものが実は涅槃として見えてくる。それが仏の功德の二面であって、「生死即涅槃」と言われるわけです。

そして、「**典攬に教授し**」。「典」という字は、辞書によると「重要な法則が書いてある重い大きな書物」という意味を元々は持っているのだそうです。そこから日本語では典に「のり」という読みが出てくるわけです。そこで、「法」というのは道理とか道筋を表すし、「典」はそれを収録したようなものを表す。だから「法典」というのは文字通り法を収録したものです。攬の意味としては「取り集める」ということのようにです。だから「典」と「攬」とで、いろんな智慧、いろんな法則、いろんな教えというものを書物にして取り纏めてきているというような意味を持っているのではないかと思います。仏陀自身が生前に説いた教えが没後に消えてしまうという危機感の中から、経典(sūtra)を議論してまとめあげる編纂事業が仏弟子たちの仕事となった。それが伝承されて次々と新しい経典が生み出され、大乘経典がまた生み出されてくる。だからその典攬に「教授し」——教え授けるというのは、「仏陀が歴史の中で大きな経典を生みだしていくようなことをした」と言い当てようとした言葉ではないかと思うのです。

そういうことと、「**威制消化す**」という。「威」という字は猛々しいという意味で、この字を「おどし」と読みます。だから、この文字自身に脅すという意味があるのだそうです。仏陀が持っておら

れる力が威厳を持っているというふうには、衆生は仰がざるをえない。何か駄目だと言って制して抑え込むことを「威制」といいますが、人為的に制限して脅すような面が完全に「消化」する。この「消化」というのは、形がない形になって新しい生命に役立つことを指しますね。ですから、威制が完全に消え去って、先にあった「福祿魏魏」というようなことが出てくると言おうしているのかと思うのです。

「十方に感動すること無窮無極なり」。この「感動十方、無窮無極」を「十方に感動す」と読むとすると、これは十方衆生のあらゆる在り方に感じ入り、その苦悩に響いて応じていくことを言い当てようとしている言葉でしょうか。自我の殻が取れて精神が開けた場合は、相手を自分勝手に解釈したり、相手の苦悩を見過ごしたりせず、相手の在り方そのものになるほど本当に寄り添う。つまり、慈悲喜捨という四無量心です。「慈」というのは、相手の喜びと一緒に喜ぶこと、「悲」というのは、相手の悲しみと一緒に悲しむこと。この慈悲喜捨という四無量心は、仏陀の教説として古くからあるのです。努力というのではなくて、そういうふうになれるような智慧を持つということが言われるのです。ですから、十方に感動することを「無窮無極」——極まりがなく果てしなくどこまででもすべきだと課題とされているのです。凡夫にはなかなか出来ることではありません。

「仏は法王として、尊きこと衆聖に超えたまえり」。仏陀は法(dharma)の王であって、この世の統治者ということではない。ダルマを自由自在に説き表す存在が仏陀なのだという意味で、どれだけ道を極めようとしている聖者(衆聖)であっても仏陀のようにはなれない。

「普く一切天人の師と為りて」、仏の十号に「天人師」という言葉がありますが、ここでは仏陀が天と人との師となっていることを讃めています。如来・応供・等正覚・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊という、仏陀を讃える語を「十号」というのですけれど、そのうちの「天人師」を用いています。仏陀が空に達して——淡々として、本当に執われなく生きておられて——僧伽の問題や苦悩の衆生を救う智慧の問題といった現場の困難に、その場その場で非常に適切に対応した面があったらしいのです。だから、世の中の在り方を能く見てちゃんと解釈している様子から、仏陀の十号には「世間解」と讃えるものもあるわけです。

「心の所願に随いて、みな道を得せしめたまう」。この所願に随う「心」は単に煩惱心ではなくて、大悲の衆生を救済する為に動かす心です。そういう願いに随って、一切の衆生に平等に道を得せしめる。菩提という言葉で「道」とも「覚り」とも「悟り」とも漢訳しますが、そういうさとりと言われるような智慧を開いて明るく生きていけるようにすると言っています。

「今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞いて歡喜せざるものなし」。「仏に値遇する」、つまり仏にまみえるということです。「見仏」とも言います。弥勒菩薩が今ここで対告衆を代表して仏に教を聞いているわけですが、「無量寿仏の声」の「声」にここでは「みな」とルビを振っていますね。つまりこれは、第十八願成就の文の「聞其名号」を示しているわけです。無量寿仏というのは「南無阿彌陀仏」ですから、「南無阿彌陀仏」という御名には、声なき声がある、声なき声で御名である。親鸞聖人は、この『大無量寿経』が真実教だと押さえられています。真実教の「体」が名号であり、法蔵菩薩の本願を開いていくという形で、名号がどういう意味をもって衆生に願をかけているのかを教えられてくる。そういうことが、この經典の持っている大事な二本柱である「宗」と「体」です。「宗」は本願を説くことであり、「体」は名号であると教えられているわけですね。

そして「歡喜せざるものなし」。本願成就文は、凡夫たる衆生が名号を聞くことが出来るならば信心歡喜すると語っている。『無量寿経』の教を聞き当ててきた歴史に出遇った親鸞聖人が、「聞其名号」こそが信心が成就することだとおっしゃる。我々に信心が起こるのは、如来の大悲の本願が成就して下さったということであって、そこで我々に本願を信ずるという体験が起こる。自分で信ずるわけではなく、自分に信ぜずにおられないという心が立ち上がって来るのは、如来の本願が成就するのだというのが、親鸞聖人の了解の仕方です。

「無量寿仏の声を聞いて歡喜せざるものなし。心開明することを得つ」。「心開明する」というのは、今ここでは弥勒菩薩が衆生を代表して、「我が心が開かれて明るくなるが出来たのだ」と言っているわけです。つまり、弥勒菩薩が対告衆として教を聞きながら仏との出遇いが成り立つと言っているわけです。悪業の歴史の因縁で絶望的な限界状況のように暗く思えるこの人生に、明るみが見えたと教えられてくる。このところも、たいへん大事なところなんです。

文責：飯島 孝良（親鸞仏教センター嘱託研究員）